

# 被災地派遣レポート〈第38回〉

産業労働局商工部経営支援課 鈴木 正人さん

## ■陸前高田市へ

平成23年4月13日（木）夜半、都庁に集合のうえ、岩手県への派遣第3陣として陸前高田市に向かうバスに乗車しました。バス内では就寝時間になっても、気が高ぶっているせいか寝付けない者も多くおり、かくいう私も一睡もせずに宿泊場所である岩手県大船渡市合同庁舎に到着してしまいました。

到着後は、荷物等を建物4階の宿泊部屋である会議室に運搬することから始まりました。合同庁舎の電気、上下水道は既に復旧しており、エレベーターは稼動していましたが、その動力である電気は、被災生活において非常に貴重なエネルギーであるため、私たち都職員は利用を自粛し、階段で運搬しました。

宿泊場所に入ると、第2陣の派遣職員により熱烈な拍手で迎えられ、その後、宿舎内のルール、被災地での作業内容等の引継ぎを受けて、いよいよ出発となりました。

## ■被災地の状況

派遣された高田小学校は比較的平地が少ない陸前高田市の中でも山間の斜面上にあり、津波の最高到達点になっていました。そのため、小学校が直接的な津波被害の有無の境界線上に建っていることとなります。その風景は余りにも残酷なものでした。小学校より海側は見渡すかぎりの瓦礫の山であり、山側では地震の影響があったのかと思うほど外傷等が少ないのです。表現は適切ではないかも知れませんが、現実の世界において「天国」と「地獄」の狭間に立たされたような印象を受けました。

瓦礫の山というのは、近づけば近づく程、より津波の破壊力の凄まじさを感じる事が出来るように思います。近づくにつれて、家屋の木材であったり、家具であったり、衣類であったりと、より自分たちの普段の生活に近い身近なものが見えてきます。身近な物が無残に損傷しているさまを見ることによって、改めて津波の恐ろしさ、自然というものの怖さを感じる事が出来ました。テレビ等でのメディアだけでは、なかなか感じにくいのではないのでしょうか。

## ■被災地の状況と従事内容

今回派遣された職員は、各局より合計30名で、5名を1班とした6班により構成されていました。その内、2組の班は本部・給食センターで市役所職員の指示のもと、救援物資の運搬、仕分け整理等を行い、残り4組の班は陸前高田市立高田小学校の開校に向けて清掃を行いました。当初、班の間での公平性を保つため、班ごとのローテーションで給食セ

ンターと学校で活動を行う予定でしたが、各派遣先の状況を把握している者がいた方が作業の効率上がることを考慮し、1班が給食センターを、自分が所属する2班が学校清掃の専属として活動することとなりました。

高田小学校付近では、津波による浸水、損傷をしてしまった体育館を、数日後の開校式で利用出来る程度まで、復旧清掃をすることが目的となりました。体育館には跳び箱、机、椅子等の備品が置いてあり、そのほとんどが津波の浸水により泥まみれになっていました。

体育館内及びそれら備品を子供達が利用できるレベルまで清掃するには、濡れた雑巾等で泥をふき取らなければならない、そのためには当然水が必要となります。しかし、陸前高田市は電気、ガス、上下水道全てのライフラインが復旧しておらず、学校裏の貯水槽からバケツリレーで水を調達せざるを得ない状況にありました。こういった作業は数人単位ではとてもやりきれる作業ではなく、東京都からマンパワーを送っている甲斐があったなど実感できました。また日頃当り前に使用するライフラインが如何に生活を支える重要なものかを痛感させられました。

派遣期間中の具体的な作業内容としては、14日（金）は校庭の清掃と備品の清掃、15日（金）も引続き備品の清掃に従事しました。16日（土）、17日（日）には多くのボランティアの方と協力しながら、体育館の床清掃を行いました。床には泥がかなり入り込んでおり、清掃する度に泥が浮き出してしまうため、非常に困難な作業となりました。とても都職員だけでは対応できない状況でしたが、ボランティアの方の多大な活躍により当初の作業目標（備品清掃と体育館床のワックス掛け）を無事に達成することが出来ました。ボランティアというものの有難みを痛切に感じた良い経験となりました。

## ■地域の絆

現地の方々とは余り触れ合う機会はありませんでしたが、非常に前向きに生活されているように感じました。都職員が校庭等で作業をしていると、近隣の住民の方から「頑張ってください！」「ありがとうございます！」と声を掛けられる事が頻繁にありました。これだけの悲惨な状況のなかで、一時的にしかお手伝い出来ない我々に声を掛けて下さることに驚くと同時に、申し訳なさを感じる出来事でありました。

学校の山側に住まわれている方々は、建物の損傷が少ないせいか、ライフラインが全て止まっているにも関わらず自宅で寝泊りをされているようでした。水や食料等は個人で入手できるような状況ではないため、定期的に特定の場所で物資の配給をする旨のアナウンスが流れていました。配給場所が学校の近隣であることから、配給の様子を度々目にすることがありました。その場所には近隣の方（20、30代などあまり若い方は居なかったように記憶しています）が、一輪台車や手押し車を持って集まり、配給物資を受け取り自宅まで運搬していました。それらは水や食料などであることから、かなりの大荷物で重量もあり、また山の斜面でもあるため、取りに来られる方々はかなりつらそうに運搬をしていました。実際、一輪台車を操作できずに横転してしまい、荷物が転げ落ちてしまった方も

いるほどです。

そんな中、40代～50代の夫婦とみられる方が、水などの重いものを近隣に一輪台車で配っているようでした。近所に住まわれているようで、届け先の方と玄関先などで雑談をしておりました。届け先の方は70代前後の女性で、受け取っていた様子から、ある程度定期的に配ってもらっている様子が伺えました。その夫婦が楽しそうに、何度か荷物を運んでいるのを見かけ、「何をしているのだろうか?」と思い、気に留めて見ているうちに、近所に配っていることがわかってきました。自分のことだけでも手一杯であろうに、他人への優しさを持てるその夫婦の姿に大変感銘を受けました。

また「遠くの親戚より近くの他人」という諺がありますが、やはりいざという時には近隣の者同士が協力、助け合うことの重要性を再認識させられました。集合住宅が多く、隣近所との付き合いが少ない都内において、今回のような地震が発生した場合、どれだけ助け合いや協力が出来るのか一抹の不安を心の片隅に感じました。

#### ■最後に

高田小学校の校長先生、非常に貴重な機会を設けて頂いた総務局の方々、仕事に穴を開けてしまうにも関わらず快く送り出してくれた職場の方々、短いながらも濃厚な日々を共に過ごした岩手第3陣の方々に心より感謝をさせていただきます。

今後は、現場に行ってみたこと、感じたことを多くの人に伝え、支援への意識を少しでも高められればと思っております。